

2023年  
4月10日 No.1698



# 週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>



## 潮流

### 効果測定を生かした教育活動に

IGS株式会社取締役、事業・開発統括部長 中里 忍<sup>Ⓔ</sup>

資料

## 21世紀出生児縦断調査(平成13年 出生児)特別報告から

———文部科学省

### CONTENTS

#### ▶ 2 潮流

効果測定を生かした教育活動に

中里 忍(IGS株式会社取締役、事業・開発統括部長)<sup>Ⓔ</sup>

#### ▶ 5 解説・ニュースの焦点

○性暴力防止で事例集と研修動画

○第五次「読書活動推進基本計画」を閣議決定

編集部

#### ▶ 8 特別企画

科学技術週間の学習資料

「一家に1枚」シリーズとは？

編集部

#### ▶ 10 特別資料

第二次提言に向けた論点整理案

編集部

#### ▶ 12 生涯発達時代のよくわかる！発達障がい入門

コアカリキュラムに見る特別支援教育の

ナショナルスタンダード<sup>①</sup>

水内豊和(島根県立大学人間文化学部准教授)

#### ▶ 14 校長講話

校則の見直しについて

並木浩子(東京都教職員研修センター教授)

#### ▶ 16 実践！校長塾

自律的な学び手を育てる学校づくり<sup>①</sup>

横溝宇人(東京都目黒区立中目黒小学校校長)

#### ▶ 19 資料

21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)特別  
報告から

文部科学省

#### ▶ 35 教育問題法律相談

疾患に伴う配慮を求められた場合の留意点

佐藤香代(弁護士)

#### ▶ 36 学校事務新時代

教職員の働き方改革<sup>②</sup>

明日、学校に行けなくなったら

上部充敬(横浜市立日枝小学校事務職員)

#### ▶ 38 学級・授業づくり 虎の巻

若手教師に意識してほしい教師の心得

依原正仁(兵庫県芦屋市立浜風小学校校長)

#### ▶ 40 管理職養成 教頭実務ガイダンス

新年度への期待

井部良一(全国公立学校教頭会事務局長)

#### ▶ 42 高校現場最前線

使命は、地域への人の還流

宮島忠史(島根県立津和野高等学校校長)

#### ▶ 44 現場の課題に応える教育機関

学校の先生を支える人を増やし、

働く環境を良くする

塩畑貴志(NPO法人教員支援ネットワークT-KNIT代表理事)<sup>④</sup>

#### ▶ 46 データで見る教育

教育課程特例校制度 ほか

#### ▶ 47 BOOK

『いつか必ず死ぬのになぜ君は生きるのか』

『英語子育ての前に知っておきたかった33のコト』

#### ▶ 48 自著を語る

『新時代のスクールカウンセラー入門』

松尾直博(東京学芸大学教育学部教授)

#### ▶ 51 品川裕香の共感教室

発達障害かも、の思い込みが覆い隠す深刻な問題

品川裕香(教育ジャーナリスト)

#### ▶ 52 マイオピニオン

教育委員会にとってのカリキュラム・マネジメント

天笠 茂(千葉大学名誉教授)

# 潮流

IGS (Institution for a Global Society)  
株式会社取締役、事業・開発統括部長

なかさと しのぶ  
中里忍さんに聞く①



## 効果測定を生かした 教育活動に

探究型学習やキャリア教育などの  
効果測定のツールとして利用されている。  
エビデンスのある研修や教育施策の  
展開などにも活用実績があるという。

外資系PR会社、オンラインメディア企業の広報および協会ビジネス担当執行役員を経て現職。慶應義塾大学大学院システムデザインマネジメント研究科で教育システムを研究中。システムエンジニアリング修士。東京学芸大学高校探究プロジェクトアドバイザーボードのメンバー。

### 気質診断では技術特許を取得

— 御社では、児童・生徒向けの「AI-GROW」だけでなく、ビジネス分野で大人を対象にした「GROW360」による評価測定などもされています。国による傾向の違いはあるのでしょうか。

中里 前回、コンピテンシーの評価では、4段階の評価基準を設けていると言いましたが、海外での社会人を対象にした評価測定では4段階の1〜4まで、個人によってばらつきが大きい傾向がありました。一方、日本人は、3や4などの評価が多い傾向があります。これは文化の違いなども背景にあると思います。こうした評価についての考え方の違いなども踏まえながら、評価という点ではデータの補正が必要と考えています。

— 評価については、バイアスの可視化なども必要ですね。

中里 これは弊社が特許を取得している技術ですが、「スマホ気質診断」という、スマートフォン上で2種類の言葉の組み合わせる診断ゲームのような測定方法があります。これは質問内容には意味がなく、回答までの時間差や指の軌跡、間違いの回数などを基に、その人の気質を判定するもので、「IAT

(Implicit-Association Test)」という社会心理学の分野で利用されている測定手法を活用しています。認知バイアスを測定することで、その人の潜在的な性格診断が可能になるというものです。

この「スマホ気質診断」を応用して、男女別に文理傾向バイアスなどの可視化もできます。例えば、「数学が苦手」などの理由で文理選択をしないように、その生徒の潜在的意識を基に文理傾向を可視化できます。「女子だから文系」など、性別を理由にした安易な自己評価や先生からの指導を防ぐために、無意識の男女バイアスを可視化したい学校にご導入いただいております。

——学校現場については、学力以外の能力評価へのニーズも高まっていますが、コンピテンシーの評価項目は、どのように決めているのでしょうか。

中里 コンピテンシーの評価では、前回、四つの分野で、最大で25項目を用意していると述べましたが、実際には個々の学校側からのニーズ、例えば、学校の教育目標や、特に力を入れている課題の効果測定などの要望を踏まえて評価項目を設定しています。

私たちが、「お薦めコンピテンシー」として13項目を提案していますが、これらの項目

は組み合わせで可視化することで、先生方にとって分かりやすく結果をお伝えできるからです。

## 感情コントロールを重視する学校も

——コンピテンシーの評価項目で、最近、選択する学校が多い項目は何でしょうか。

中里 学校によって、選択する項目はいろいろですが、最近、増えていると感じるのは、「自己」分野の「感情コントロール」です。これは「負荷がかかる状況であっても、自分のストレスを自分自身でコントロールすることのできる能力」のことです。そのために、「瞑想(めいそう)」などのトレーニングを取り入れている学校もあります。

「認知」分野での評価への関心は以前から学校では強いのですが、「自己」や「他者」「コミュニティ」など、コンピテンシーの他の分野への関心も、ここ5年間で増えています。私たちは、評価の項目自体は、普遍的なもので、経年変化を見るためにも変えない方がよいと思いますが、個々のコンピテンシーの中心は、時代の変化によって意味合いが変わっていくものもあると思います。

例えば、「他者」の分野に「共感・傾聴力」や「外交性」があります。以前であれば「お

となしく人の話を聞く」ことを「良し」としていたが、最近は、「相手の気持ちを尊重する」などの態度がより重要になっている、などです。その意味では、個々の項目の評価基準は、時代の変化につれて、絶えず見直しが必要になっていると思います。

——学校では評価というと教師が行うものという意識が強いですが、生徒同士の相互評価で見えてくるものもありますね。

中里 私どもが提供している学校向けの評価ツール「AI GROW」は、コンピテンシーの評価を生徒が相互評価し、バイアス補正にAI技術を取り入れたものですが、評価結果は、教師によるその生徒の評価とは異なることもあり、個別的な指導などに生かすことができます。

生徒にとっても自己評価を高めるには、生徒間だけでなく、例えば地域の人との触れ合いなどで「褒められる」経験をすることなども必要ではないでしょうか。そのためには、生徒がさまざまな幅広い体験をする機会を増やしていくことが必要になっているように思います。

——多面的な評価という視点から見れば、生徒の相互評価だけでなく、保護者や地域の人からの評価も重要ですね。

中里 人を評価するということは、考えや態度というよりは、その人がどう行動しているかが、問われてきます。場所が変われば、その人の「振る舞い」も変わる、という意味では、学校生活だけでなく、家庭や地域での「振る舞い」も、その人の評価につながってきます。

その意味では、学校だけでなく、さまざまな場面での、多様な人からの評価をフィードバックしていく仕組みが求められていると思いますし、それ自体が社会資本となるような人間関係づくりへの貢献を、私どもとしても挑戦したいと思います。

## 教師集団の「気質」活用や行政との連携も

——学校の教師を対象に相互評価などで導入しているケースはあるのでしょうか。

中里 気質の測定などで実施している学校のデータを見ると、学校の教師は、一般の社会人に比べると、保守性が高いという特徴があります。他に、外向性、平穏性、協調性、自律性も高い傾向があります。ただ、新しいことに自主的に挑戦している公立学校では、逆に集団として「開放性」が高いという特徴がありました。

もちろん、管理職や教師が優秀という側面

もあるとは思いますが、こうした教師集団の「気質」を踏まえることで、研修なども、より効果的に実施することができのではと思います。

——個別の学校での導入事例や活用例、また教育委員会などで活用しているケースはあるのでしょうか。

中里 個別の学校での導入や活用の事例については、教育事業部のサイトで紹介していますので、参考にさせていただければと思います。

例えば、三重県教育委員会では、経済産業省の「未来の教室」実証事業に参加したことを踏まえて、令和2年度から県独自の「学びのSTEAM化推進事業」に取り組んでいます。この事業は県内の4校を指定校に、STEAMの視点を取り入れて学校独自の探究学習に取り組むというものです。

令和3年度からは、「Ai GROW」で生徒のコンピテンシーの向上に効果があると判明したSTEAMプログラムを、商業、工業、農業学科を設置している高校で実施して、論理的思考力や課題解決力などの能力の向上に取り組んでいます。この三重県の高校では、弊社のデータサイエンス講座などを生徒向けに活用していただいています。

——「Ai GROW」の他に実施されている教育関係のサービスはありますか。

中里 「Ai GROW」は生徒の資質・能力と各種教育活動の効果を定量化する教育機関向けの評価ツールで、探究型学習やキャリア教育の評価、進路指導のデータや、カリキュラムマネジメントのエビデンスなどに役立てていただいています。この他に「GROW Academy」「e-Spire」「探究力測定」などのサービスを提供しています。

また、学校の先生方や教育委員会の関係者を対象とした、セミナーやイベントなども実施しており、開催情報や内容報告なども掲載していますので、参考にさせていただければと思います。

評価の信頼性を高めるには、データを積み重ねていくことが大切ですので、これからの学校現場や教育委員会などと連携しながら、研究成果などを学会などで報告していきたいと思っています。

活用事例の紹介サイト＝<https://blog.ai-grow.jp/case>

訂正：前号の中里氏の肩書は正しくは、事業・開発統括部長でした。訂正します。

